
密室にて 2

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

密室にて2

【Nコード】

N3210BA

【作者名】

ゴンギツネ

【あらすじ】

ええ。『密室にて』の続きです。同じ人が解決します。

「ただいま」

久しぶりに帰る実家。父は死んでいないが、平和な家庭だ。ノックをする。木製のドアに、乾いた音。

「おかしいな」

来るとは、伝えておいたはずだ。何回もノックしたはずなのに。仕方が無いので、鍵を出す。

かちやり、と。鍵独特の開閉音。

中は、2年前とは大きく変わっていた。エアコンは、新しくなっていたし、中はそれとなく変わっていた。そういえば、電話で、リフォームをしたと聞いた。

不意に。

異臭を感じた。

異臭の発生源と思われる場所へ行く。

あったのは、腐った死体——白髪に、変色した黒い肌。見覚えのあるネックレス、それに、指輪。——母だ。死んでいる。

震えてしまって、出るべき声すらも出ない。しかし、頭の中は、警察に電話することではいっぱいだった。

「原因は、心不全だと思われます」

眼鏡を掛けた医者が、平然と言う。なんで平然としていられるのだ……。

「え？ もっと、——別の何かです……。もう一回——」

そう。素人目に見てもわかった。

——あれは異常だ。どこが、と問われれば、言えるわけではない。しかし、なにかしらの違和感。

「当病院では、心不全だと思われます。なんなら、他の病院に行
って検査をしたらどうでしょうか」

冷酷な宣言。きっぱりと言われた。

料金を払って、自動ドアをでる。

今日は、風が強い。秋だったら、カラカラと落ち葉が舞っている
のだろうか。

彼は、能面のような無表情な顔で、携帯電話を取り出した。

「はい。……はい。ええ。では、行きます。ここからなら――、
15分くらいですかね」

表示を『C開店r o w s』にして、釜崎優奈かまざきゆうなは、『釜崎探偵所』と書
かれた看板がある建物から出た。

なんでも、現場は密室、それに、被害者が見つかったのは死後6日
たっているから、事件性はなしと見られているらしい。

現場に着く。

家の中は、未だに死体独特の異臭が残っていた。

思わず、鼻をつまむ。

依頼者と鉢合わせした。なんとなく、気まづくなり、「すいませ
ん……」と謝った。

「いえいえ。それより、こんなものを見つけたのですが、なにか
関係ありますかね？」

目の前に突き出されたのは、指紋がベツタリとついたセロハンテ
ープだった。

「それは何処で見つけたのですか？」

「その鍵――サムターン錠と言うんでしたっけ？ それにくつつ
いていました」

「警察には言いましたか？」

「いいえ、見つけたのは今日でしたから」

部屋を見渡すと、機械的な感じがあった。

ふと。依頼者の手元を見る。依頼者が弄っているそれは、四角い——リモコン？

「それは何ですか？」

「え？ これ……ですか？ なんでも、この家にある機械を動かすリモコンらしいですよ？ 換気扇とか、エアコンとか。リフォームした時に買い換えたらしいです。……お母さんが、老人だから、動けなくなったことを考えてらしいですよ。……少し、欠けていますが、落としたんでしょいか？」

脳裏に、稲妻が走ったような衝撃。

「もしかして、死亡したと思われる日に、そのリフォーム業者から、点検とか、掃除とかしていませんか？」

「よくわかりましたね。その通りですよ」
そう言うのと、彼は領収書を見せた。

「では、これはおそらく殺人事件です」

鬱々とした感情に、1つの光が見えたような気がした。暗い表情を見せないように努力しているが、内面ではふつふつと怒りが沸き上がってきた。

「まず、被害者は、殺されました。死因はわかりませんが、注射器で空気を注入されたら心臓麻痺を起こします。まあ、犯人に聞けばわかると思いますが——」

そう言って、彼女はサムターン錠を右手の人差し指で指した。

「このサムターン錠についていたセロハンテープ。これが最大の証拠ですね」

「何が——どういう、方法なんですか？」

震える声で、ゆっくりと聞いた。

「まず、長い紐——ここから、あの換気扇までの長さですね。――」

「長い紐を用意して、そのセロハンテープでサムターン錠にくっつけます」

そう言って、今度はセロハンテープを指さした。

「そして、その換気扇まで紐を引っ張る。そうしたら、リモコンを持って外に出ます。次は、リモコンを使って、換気扇を起動させます。そうすると、換気扇が回って、その紐を巻きあげていきます。換気扇は上にありますから、当然、紐も上へ引っ張られます。サムターン錠は、上へ持ち上がって、閉まりまるはずです。おそらく、犯人もセロハンテープが剥がれることを予測していなかったのでしょうね。……案外抜けている犯人ですね。まあ、点検に来たなら、掃除といって換気扇の蓋を開けることくらい出来ますから、その時に回収したものでしょうね。お金目当ての犯行だと思っていいと思います」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3210ba/>

密室にて2

2012年1月8日10時46分発行